

韓国の読者の皆さまへ

本書は『生命観の探求—重層する危機のなかで』（作品社、2007年）をもとに再編集した韓国語版である。「生命」という観念が近代以降、いかなる仕方で科学・哲学・文学・政治的思考のなかに浮上し、変奏されてきたのかを、日本内部の思想史に閉じ込めることなく、国際的かつ長期的な流れのなかで改めて配置し直そうとする試みでもある。今日、生命と技術、データと政策が絡み合い、新たな問いが絶えず生成されているだけに、韓国の読者の皆さまにも、本書を東アジア的経験と世界史的思考とを併せて測るための一つの座標として読んでいただければ幸いである。

韓国語版は全5分冊として刊行し、原著の「序説」および第1章～第12章の構成に加え、第7章として、戦前期日本を代表する文化哲学者・和辻哲郎が出発点を築いた『ニイチェ研究』（1913年）を論じた一章を新たに付け加え、「序説」および第1章～第13章から成る構成とした。この章は、その後に連なる諸傾向へと入っていくための入口として置いたにすぎず、それ以外の点については大きく手を加えていない。なお、翻訳にあたっては、金炳辰氏ならびに朴利鎮氏が大変な労力と長い時間をかけて尽力してくれた。まず初めに、両氏に深い感謝を捧げたい。

副題に「重層する危機のなかで」とあるのは、1980年代に地球環境汚染や気候変動などの危機が浮上したこと、生物学で遺伝子やゲノムに関心が集中する傾向が強くなっていたことから、自然科学・人文系諸科学を問わず、生命中心主義(Life-centrism)と呼んでよい諸傾向が台頭したことを承けている。実際、生物学関係では「生命」を中心概念に据えた大きな体系の再編制が提案されたりしていた。1980-90年代には、日本の人文系で、日本特殊性論(日本文化はそもそもユニーク論)がに猖獗を極めようとしていた時期にあたり、その根底に「アニミズム」の伝統を想定する傾向も伺えた。

そうした風潮に対して、わたしは人文科学の一つの方法として「概念の歴史性」を対象化する共同研究を哲学・宗教学・文学などの諸先輩や同僚などに呼び掛け、河出書房新社の『文藝』などで特集を組み、論集『大正生命主義と現代』（1995）を刊行、NHK教育TVで2時間枠の番組を制作してもらい、自著『「生命」

で読む日本近代一大正生命主義の誕生と展開』〈日本放送出版協会、1996〉も刊行した。当初は、日露戦争後に「生命」という語がジャーナリズムに氾濫したこと、いわゆる「大正デモクラシー」の底に機械文明の進展によって「生存権」（今日の基的人権）が脅かされているという問題意識が横たわっていたこと、フランスのアンリ・ベルクソン『創造的進化』（*L'Évolution créatrice*, 1907）のキー・コンセプト「エラン・ヴィタル」（*elan vital*、生の跳躍）が流行したことなどに着目し、“vitalism”を「生命主義」と訳し、「大正生命主義」と呼んで共同研究をスタートさせた。

20世紀前期に欧米で“vitalism”が台頭したことは哲学界では知られていたが、日本で、それが東洋の伝統思想で受けとめられ、神秘的傾向を帯びて多様化し、端の見えないような大思潮になって渦巻いていたことに注目する人はほとんどいなかった。「生命主義」の語に対して戸惑いも生じ、奇異なことでも言い立てるかのような反応もあった。提案が受け止められるまでには努力が必要だった。

最初は1992年、河出書房新社の『文藝』（秋号）や『現代詩手帖』（9月）で特集を組んでもらい、1993年12月にはNHK教育TVで2時間枠の番組の制作にも携わり、論集『大正生命主義と現代』（河出書房新社、1995）を刊行、自著『「生命」で読む日本近代一大正生命主義の誕生と展開』〈日本放送出版協会、1996〉も刊行した。次第に海外の日本近代の文芸や思想の研究者に関心が広がり、カナダのモントリオール大学とマギル大学、ロンドンのケンブリッジ大学、パリのフランス国立高等研究院（EHESS）での講演やノルマンディーの古城、スリジー・ラ・サルでのシンポジウムなどを重ねた。

研究の進展につれて、だが、大きな見渡しを変更しなくてはならなかった。イギリスでは1830年、産業革命が一段落した頃、ヴィクトリア朝最大の思想家、トマス・カーライルが「機械の時代」の到来に人間の精神力をもって対抗する姿勢を鮮明にし、それが大西洋を越えてアメリカのラルフ・ワルド・エマーソンの超越論に飛び火し、実際に20世紀への転換期から、物心両面にわたる“vital energy”すなわち“universal life”（普遍的生命・宇宙の生命）という観念が飛び交いはじめていた。日本では、それらの刺戟を受けて日清・日露戦間期から北村透谷、高山樗牛、岡倉天心らがそれぞれに神秘的偏りをもつ生命主義を唱えて

いた。それゆえやがて「大正」は外すことになった。試行錯誤が20年近く続いたのだった。

本書は、わたしのまだ50代の仕事である。そこここに発見の歓びもあれば、素朴にすぎる考えも覗いている。個別テーマは、まだまだ発展可能性をもっていよう。わたしは、そののち、カーライルの提言がフリードリヒ・エンゲルスに受け止められ、マルクス主義にも展開した軌跡や、日本の戦時期の国家神道も生命主義に染まっている様子などを『近代の超克—その戦前・戦中・戦後』（2015）に追いつき、20世紀後半の欧米の自然科学の動きとそれを受容した日本のそれを比較し、近現代からの意味づけを引きはがし、東アジアの古代からの生命観を自然観との3 関係で再考する『日本人の自然観』（2019）をまとめた。20世紀後半の欧米の自然科学の動きとそれを受容した日本の思想史を歴史的に相対化し、古代からの流れを辿りなおしたもので、これまで最も精確なものに近づいていよう。さらには西田幾多郎の哲学の展開を国際的な哲学史のなかに位置づける『歴史と生命—西田幾多郎の苦闘』（2020）をまとめることもできた。いずれも作品社の高木有氏の手で刊行された。

そののち、日本近現代詩人を代表する詩人の1人、萩原朔太郎の歿後80年を意識した2023年の四季派学会での報告を準備しながら、わたしが考えていたのは、明治期に漢詩に親しみ、次いで七・五調の詩風に移り、そして口語体自由詩に移行した朔太郎の詩風の変遷と彼の詩論、とくに詩集『青猫』の巻末に付した「自由詩のリズムに就て」との関連だった。1942年、萩原朔太郎歿後、詩誌『四季』の追討号に「この詩人の日本語に対する語感、深くは日本語の本質と淵源にとどいてみた。この詩人無くして日本の詩は有り得なかった」と傑出した評価を与えたのは、高村光太郎だった。だが、先の問題に実質的な決着をつけたのは、第2次世界大戦後、とりわけ韻律に意識的な詩で活躍した詩人・那珂太郎が朔太郎の口語自由詩のことば、とくに音韻に分け入って、その詩法の特質を論じた「朔太郎の詩の概観」（1970）まで待たなければならなかった。その序にあたる節の最後で那珂太郎は、こう述べている。「『月に吠える』の詩法が独創的なまでに近代的だったとするなら、むしろ作者の生意識こそが、独創的なまでに近代的だったのであり、彼の詩におけるリズムなり、イメージなりの、——「言葉そのもの

のいのち」の深い把握は、彼のそのような意識の深さに応じてはじめて可能だったことを、見なければならぬ」と。それ以前にも、それ以降にも、朔太郎の詩のことばと彼の「生意識」とのつながりを抉った論考は皆無に等しい。このように萩原作太郎論を書き出して、気づいた。わたしは1970年代に那珂太郎の詩と詩論に惹かれ、「作者の生意識こそが、独創的なまでに近代的だった」とか「『言葉そのもののいのち』の深い把握」とかの語に強く引き寄せられていたことに。

賢明な読者の皆さんは、もう気がつかれたと思う。わたしもまた若き日に「言葉そのもののいのち」という語や生命中心主義の思潮に引き寄せられていたのである。つまり生命中心主義は1970年にも生きており、1990年代まで盛んだったのである。

つまりは、うかつなことに、わたしは、つい最近、自分が長く取り組んできた問題意識の出所に気が付いたという話なのだが、そこから詩人や作家の仕事を彼や彼女らのキャリアに還元する文芸論と決別し、文芸表現そのものと向き合う姿勢をつくってきた。その意味では、わたしの「ポスト・モダン」、日本「近代」を歴史的に相対化する契機は、そのようにして開けたことにもなる。その契機を与えてくれた那珂太郎に、そして生命主義という国際的な思想の渦にも感謝を捧げなくてはならない。

個々人の生命意識は、死ねばなくなるだろう。だが、生命という観念は死を容易に超える。観念のみならず、宇宙が生きて活動していることは誰にも実感できる。この涯のない宇宙でたった一つの掛け替えのない生命も実感できる。そのあたりに「生命」のすばらしさと恐ろしさとが潜んでいる。これほど粗末にできないものはない。それはあらゆる生命の住処と同じだろう。

韓国の読者の皆さまが本書を通して、「生命」が単に美しいスローガンではなく——知と制度、想像力と責任の配置のなかで——繰り返し問い直されるべき問題であることを、ともに確認してくださるなら、私としてはこれ以上望むことはない。

東アジア東端の島国で

2026年1月 著者識